



スーツがはちきれそうな
胸筋を誇る俺の兄貴は

今日も女のように鳴いて
メス堕ちしていく

俺が心から敬い慕い、つき従う兄貴はその筋の人間らしくらず、なかなかの爽やかなイケメンだ。

固いワックスでオールバックにしてグラサンをかけても、町を歩いていると、堅気の女が見惚れるほど。

そして堅気の男が見惚れるほど、週七ジム通いの賜物の筋肉美を誇る。ベシヤツのボタンを弾きとばしそうに胸筋を見せつける本人は「相手に舐められないため、威圧するためだ」とのたまっているが、男がむけてくる視線に多少、熱がこもっているのを知らない。

まあ、そんなこんなで堅気に受けがよさそうな容貌をしているからに、

カフェやレストラン、メイド喫茶の運営、管理を任されている。

なにかと厳しい今の時代、堅気がするような商売にも手を広げているのが裏社会の裏事情。

もちろん、ばれないよう前科のない一般人を店長に仕立てて裏から手を引いているわけだが、放置しておくとはサボったり中抜きをするから、定期的に会いにいき睨みをきかす必要が。

任侠映画が大好きで昔堅気な兄貴にしたら刺激が足りなさすぎる役割とはいえ、忠誠を誓う会長の指示となれば、真面目一辺倒に仕事をこなすというもの。

今日も今日とて、堅気の経営者らしく見せかけ、高級スーツを筋肉で張りつめさせながら、秘書風の俺を従えて店回り。

まず足を運んだのはメイド喫茶。

裏口から踏みいると、とたんに「あー！吟田さああん！」「久しぶりい！待ってたよお！」「もー寂しかったんだからあ！」と黄色い歓声が。

「はっ、ははは・・・吟田さん、ここ勃起している」と足のすねで胸を擦りあげると「んふうう・・・！」と鼻にかかった吐息が。

舌なめずりをして足のすねですりすりしつづけると、肩を跳ねて涙目で睨みつけ、しきりに顔を上下させちゅぷちゅつぷ！

「ああ、ああ、ああ・・・吟田さん、最高ですう！」とイきそうになり、兄貴の頭をつかんで引き剥がして、思いつきりぶっかけ。

かるく咳きこみながら、舌を垂らしたまま赤ら顔で見上げてくるのに「は、はあ、たく、だめですよ、そんな顔したら、またイきそうです・・・」と萎れかけたのを即復活。

そのくせ乳首をこんなに固くしやがって、俺の乳首にすりすりしやが

って、てめえのばっちいザーメンを息子になすりつけやがって、淫乱すぎて頭いかれてんのか？
男ならだれでも見境なく腰をふって煽りやがるのか？

おい、答えろよ、兄貴の俺様が聞いてやっっているんだぞ」

さっきは唇を噛みしめ堪えていたのが「あ、ああ、白銀、さあん、いい、ですかあ・・白銀さ、白銀さあ、はああん、ああ、ああ・・・」と焦がれるように呼んで、ひたむきに体を擦りつけ、精液だだ漏れに卑猥な水音をたててやまず。

「くそ、てんめえ、俺のことそういう目で見てんのか？キシヨいんだよ。死ねよ」と痛罵されるも「ち、が、けどお、俺、俺え、白銀さ、気もちよく、なあってほし、はう、んふ・ふああ・・」とさらに密着

「ふつ、ふふふ・・女も呼んでさせたが、やっぱりお前のおっぱいに挟まれねえと息子は元氣にならなくてな。

よい、よいぞ、よいよい、吟田・・固くてほどよい弾力があって、輩のくせに赤ん坊のようにつるつるした肌の胸は、まったくあ極上だ」

「ああ、ほんと、女を抱いたあとの余熱があるお前に、女のように奉仕させるのは格別だな」とくつくつと囁かれて、かっと赤くした顔を伏せてしまう。

濡れた巨根をぬるぬる扱きながら「今ごろ虚しく自分を慰めているだろう女が、今のおまえを見たらどう思うだろうな？」いたぶられ「ほら、乳首が寂しそうだぞ。自分でかわいがってやれ」と命令されて「か、かいちよお、ご、お戯れ、を、はっ、はあ、あああつ・・・」と胸を揉んで突起を指でひっかく。

安産型の腰をつかみ、奮い立つ息子に急かされるまま、奥までぐぷぢ

ゆううう！

「んうつつつ！」と腕を噛んで声を殺し、ドアを軋ませて「あああつ、ほんもののちんこだあ・・・！」と歓喜するように腰をくねらせて悶える。

初っぱなから「精液一滴のこらずくれろやあああ！」とばかりすさまじい吸引をしてきたのに歯噛みし、店に迷惑になろうがかまわず鳴かせたくて腰の強打の畳みかけ。

「兄貴！兄貴い！もお、俺のちんこ、旨旨ってしゃぶりつきすぎい！生きていない冷たいちんこで女に犯されると、むしろ焦れったくなっちゃうんすかあ！？



水泳部のコーチは
エッチな男子高生を
依怙贖するいけない大人

高校の強豪水泳部のエースは二人。
一年の西野と二年の俺。

二人とも自由形百メートルを得意とし、十代では突きぬけて速いタイムを叩きだす。

全国大会では、たいてい一位二位を俺ら二人が独占。

そうして二人で競いあい切磋琢磨していたものを、世界大会が近づき、日本代表の選考が本格化。

協会の人々が耳打ちしてくれたことには自由形百メートルの一枠は十代から選ぶという。

となれば毎度、全国大会の一位二位に輝く俺と西野どちらかにちがいない。

もちろん俺はあと四年待っているつもりはなく、十代での出場を果たし、メダルも狙いたいところ。

西野も同じ思いのようで、このごろのタイム争いは前に増して熾烈。俺が短いタイムを叩きだせば、西野はわずかでも秒数を縮めるという目まぐるしくいたちごっこ。

このままでは二人の成績はどっこいどっこいで、大人たちは実力以外を見て選ぶ可能性が。

それは大いに望むところでないので、タイムにかなりの差をつけないと。

「にしたって、現実問題は難しいし、どうしたものか？」と悩んでいたところ水泳部に新しいコーチが就任。

前の世界大会で銀メダルをとった早波さんだ。

「母校にすこしでも恩返しをしたくてね」とのことで、これはチャンス。

うまく早波さんにとりいり、特別扱いされて指導時間を長くしてもらえば、西野と差をつけての成長、技術向上やタイム短縮ができるだろう。

というわけで、その日は早波さんに徹底的に媚びへつらい、一段と気合をいれて泳ぎ「世界大会の泳ぎには痺れました！」とひたすらよしよをして、マニアックな水泳談議に話を咲かせたのだが。

翌日、プールにきて元気浚刺と挨拶をし、早波さんの元へ一目散「あ、あの昨日話していた泳ぎ方、見てもらえますか！」と声をかけたところ。

「ああ、わるい、西野との約束が先なんだ」

にこやかに断り、プールにはいつて手とり足とり西野の指導にご執心。いくら待っても西野から離れず、二人して夢中で話しこんでいるから口を挟むこともできず。

やっと水からでてプールサイドを歩くのを追い「昨日、教えてくれたストレッツチ、実践してもらえませんか！」と食いさがるも、また「ごめんごめん」と八の字の眉で。

「今から西野のマッサージをしてやらなきゃならないんだ」

二回も西野がらみで断られ、いやでも察しられた。

早波さんにとって俺はアウトオブ眼中であり、西野にしか興味がないのだと。

思ったとおり、以降、早波さんは部活中、西野から一時も離れず、俺以外の部員や顧問などの大人たちも寄せつけず。

部活が終わっても「彼の母親の体調が長く優れないようでね」とかなんとかで車で送るという至れり尽くせりぶり。

贅沢な個人指導による賜物か、このごろ西野は好成績を連発し、俺は歯が立たず、秒数の差が広がるばかり。

おまけにまわりからは「メダリストとして将来性があるように見える

のは西野だけなんだ」と冷たい目をむけられ、負け犬扱いされるし。

どんどん状況悪化するし、陰で笑う声がいとも聞こえるようだし「メダリストの目から見て俺には才能がないのか・・・」と絶望しかけたが「いや、待て待て！」と思い直した。

閃いたのだ、早波さんが依怙贖しているのは将来有望だからでなく、西野が卑怯な手を使っているからだ。

メダリストを惹きつけるだけの才能と魅力がないことを認めたくなく、西野を悪者扱いしているわけではない。

なんとって、西野には前科がある。

小学生のころは大会で優勝候補の水着をカッターで切り刻んだし。

子供とはいえ、一端のスイマーとなると水着の着心地ひとつで影響が

でるからで、実際、決勝でその子は最下位に。

中学生のころはコーチの不倫の現場を撮って、その動画で脅して特別メニューの指導をさせたというし。

それほどの悪事をして世に知られても、水泳界から追放されなかったのは、まごうことなき実力があつてのこと。

そう、真の実力者の西野は小賢しい真似をせずとも勝てるというのに、確実に栄光を手にいれたいがために、節操なくあの手この手をつかうのだ。

その食欲さは病的なれど、高校生になって日本代表入りが見えてきたなら、さすがに大人しくなった。
と思いきや、なんのその。

長年のライバルである俺の目を誤魔化すことはできず「日本代表メンバー決めが迫って、焦ってわるい癖がでてしまったか！ふははは！ばかめ！」としたり顔。

メダリストの早波さんに賄賂的なものを渡したにしろ、弱みをにぎって脅迫しているにしろ、その証拠をつかんで悪事を暴けば、絶対に西野は日本代表に選ばれず、俺の完全勝利。

水泳の勝負を制しての、文句なしの選出にならないのは不本意なれど、不当にコーチを独り占めしてレベルアップし、まんまと日本代表入りをされたら、もっと不本意。

プールサイドで「俺なんか・・・」と萎れていたのが一転「地獄に叩き押してやる！」と俄然、奮い立って早速、証拠をつかもうと。

妻の目を盗んで義父と深夜の温泉で

しげこむ訳あり理系筋肉の秘め事



深夜二時にふらふらしながら部屋をでて温泉へ。

桶に組んだお湯をかけて、一息ついたなら体を洗おうとタオルを泡立てる。

まず腕を洗おうとし、自分の体に赤い跡とひつかき傷が散らばっているのを見てため息。

それを聞き咎めたように「圭一くん、お疲れのようだね」と背後から声が。

ふりむくと妻の父親、俺にとっては義父が微笑して、やおら隣へと腰を下ろした。

ついさつきまで妻を抱いていたものだから「お疲れのようだね」の言葉に含みがあるように思えて恥ずかしいやら居たたまれないやら。

「い、いえ・・・なんだか眠れなくて」とぎこちなく笑って誤魔化せば「ああ、わたしもだよ」と読めない表情のままシャワーを。

鏡に向いていたのが、ちらりと見てきたのにぎくりとするも「きみはほんと見惚れるような筋肉質な体つきをしているなあ」と思いがけない誉め言葉。

「わたしもジムに通って励んでいるのだけだね、なかなか理想の筋肉がつかないのだよ。

やっぱ圭一くんは若い分、肌には張りがあって瑞々しいし、筋肉は厚みと弾力があるし、全体的に筋骨隆隆としたブロンズ像のようで絵になつて羨ましいな」

視線が舐めるように肌を滑り「お義父さんこそ、見惚れるような体をしているのに・・・」と漏れそうになった熱い吐息を飲む。

長身で引きしまった体はスタイル抜群、大企業の社長ながら、だれに対しても物腰柔らかく、男にも紳士的に心を砕くから、そりやあ恋心を寄せる人は数知れず。

奥さんを病気で亡くしたあと、なかなか再婚しないのもポイントが高いらしく、多くの老いも若きものの女性が獲物を狙う肉食獣のように目をぎらつかせて狙っているとの噂。

男から見ても魅惑的な人であり、頬を熱くしながら「お義父さんにそういうられると、うれしいですが・・・」と視線をそらす。

「俺、大学生のころはカヌーをしていて今も趣味で・・・というのは前に話しましたよね。

もちろん漕ぐのに筋肉が必要ですが、つけすぎると重くなってカヌーが沈んじゃうんです。

だから、ほどよく鍛えようとするわけで、ジムのトレーナーに相談して計画的に慎重にトレーニングをして、なのに、どうしても必要以上に肉つきがよくなってしまう。

カヌークラブのリーダーには筋肉デブ！ってよく怒られています」

「筋肉デブ、ねえ」と笑いつつ、向ける視線はねっとり。

落ちつかなくてカヌーの話をつづけようとしたら「リーダーに叱られても娘はよろこんでいるのでは？」と柔らかい口調ながら皮肉っぽく。

「娘はとんだじゃじゃ馬で、人並みの雄馬相手では、とてもとても満足しないだろう。」

きみほどぶ厚く固い筋肉をまとい、カヌーじごみの筋力を持つ男なら、娘を極楽へと誘ってくれているんじゃないか？」

「そ、そんな・・・」とうつぶいて、ひたすら太ももをタオルで擦りつつ、腰あたりに舐めるような視線を這わされて、むず痒くてたまらない。

太ももを震わせて、でも、できるだけそ知らぬふりをして「そういえば」と話をそらす。

そのあとも妻との夜の事情を揶揄されながら世間話を交わせ、胸をそわそわするも、義父の低く掠れた声が耳に心地よくて眠気が。

そのうちうつらうつらしだして「圭くん？」と呼ばれて、上体を跳

ね起こした。

「す、すみません・・・！」と向きなおれば「心配しただけだ。謝ることではないよ」と仏のようなほほ笑み。

なれど「じゃじゃ馬の娘を乗りこなすのは大変、疲れるだろうからね」と俺の心をかき乱すのも忘れず。

「はからずとも、そんなふうに育てたわたしに責任があるだろう。だから娘の代わりにわたしが労ってあげようではないか」

「さあ背中を流してあげるから」と指示されて、ややためらいながらも背中をむけて、すこし上体を前に倒す。

息を飲み鼓動を早めて洗ってくれるのを待っていたら、思っていたのとちがう滑らかな感触がして「っ！」と胸をそらす。

「お、お義父さ・・・！」と顔だけふりむけば、白い液体が滴る手のひらを見せてから「きみのきめ細かい肌を傷つけたくないから、ね？」と両手で背中をぬるぬる。

指先まで神経が通った繊細な手つきは相かわらず、極上のマッサージを受けているようで、でも、心拍数も体温もあがりばかりで「は、はあ、お、お義父さん・・・」と喘ぎを駄々もれに涎を垂らしまくり。

「まったく・・・これは娘が？」と引つかれた跡にボディソープを塗りこまれて、傷口がひりつくのに「んん、あ、ああ・・・」と悩ましい声を。

彼女にふられて体の熱を持て余す

ジムトレーナーは

蛸の触手に愛でられる夢を見る



「エッチのときコータくんは・・・」

思いたすように宙に目を向けながら、結局、口を閉じてしまい「ごめん」と。

彼女が別れたがっている理由がそりゃあ気になったし、教えてもらえれば、改善することができ、やり直せるかもしれないし。

そう思いつつも、意気地がなくて聞けずに彼女のアパートから去ることに。

ジムのトレーナーという職業柄、屈強そうな体つきをしているとはいえ、幼子のように肩を縮めて大号泣。

住宅街だから声を抑えつつ、大粒の涙をこぼしまくったが、さいわい人と遭遇せず、自宅アパートに到着。
まだ溢れてくる涙を腕でぬぐって敷地内に踏みこむと、駐車場に異物を発見。

蛸だ。

ぐったりとしているとはいえ、頭の部分を伸縮させているからに生きているのだろう。

ここは海から近いといっても蛸が地面を這ってくるには遠すぎる。

「輸送中のトラックから逃げだしたのかな」と考えつつ、さて、どうしたものか。

死んでいたなら生ゴミとして捨てるところ、息も絶え絶えながら生きているとなれば厄介。

わざわざ殺して捨てたくはないし、放っておいて翌朝、絶命したのを見るのは目覚めがわるい。

「この優柔不断さで、彼女にふられたんだろうな」と感傷に浸りつつ、ため息をついて一旦、自分の部屋へ。

ビニール手袋をして、その手で蛸をバケツのなかにいれると、部屋の水槽のなかへ。

「わたしの家には場所がなくて」と彼女に頼まれて置いていたもの。すこしまえに「スペースができて新しい水槽を買ったから」と熱帯魚を持っていったら、今は空っぽ。

「こんどコータくんの水槽用の熱帯魚を買いにいこうね」と誘われていたのが、行けずじまいに。

また泣きそうになったのを堪えて、水槽へ蛸を投入。

熱帯魚仕様の水質で蛸が飼えるかは分らなかったが「死んだら死んだで捨てよう」と調べる気にもなれず、失恋の傷心でそれどころでなかったし、ベッドに倒れこんで爆睡。

翌朝、アラーム音で起きるも、まだまだ失恋を引きずって氣力が湧かず。

朝ご飯代わりにバナナを食べ、水槽のまえを通ろうとし、忘れかけていた蛸を目にして、一瞬、驚きつつ、生きていることを確認してから仕事へ。

自覚する以上に俺の憔悴ぶりはひどいらしく、客へのアドバイスが頓

珍漠だったり、客が相談するのに上の空だったり。

上司も同僚も客も「風邪を引いたのか？病院につれていこうか？」「顔色がゾンビだぞ。早退したほうが」「おじさんでいいなら悩みを聞いてやろうか？」と心配するほど。

仕事でへまをするのを怒られたり責められたり注意されたりしないほうが辛かったものの「失恋で仕事を休む自分はもつと情けない」と踏んばって、どうにか一日仕事をこなした。

心身疲弊しきって、今にも倒れそうに帰宅。

そのまま昨日のようにベッドインしようとして、水槽の蛸が触手を盛んに揺らしてるのを見て「なんだ、元気になったじゃないか」とすこし気分が上向く。

そういえば蛸はなにを食べるんだ？と考え、思いだしたのは冷凍庫につめられた大量の刺身。

「漁師町の実家から送られてくるの食べきれないし、うちの冷凍庫にはいりきらなくて」と彼女が置いていったの。

別れた彼女の置き土産として重荷に思えたが、水槽の蛸を見つめることとし。ばし。

冷凍庫から鯛の刺身をとりだし流水で解凍を。

解凍するまでに洗濯物をして風呂にはいり、かるい食事の準備。

ビールを一缶空けたところで食べごろになったから、包丁で小さく切って水槽のなかへ落とした。

すぐに気づいた蛸は触手を刺身に巻きつけ、八本の足の付け根、その

真ん中にある口に吸いこんだよう。

とたんに底を蹴って跳ねたと思えば、眠たそうな目を俺にむけたもので。

まるで「おいしい！」と跳びあがって「もっともっと！」とおねだりしているような。

「蛸ってそんな知性があったけ？」と首をひねるも、まるで食レポをするタレントのようなリアクションをするのがおもしろかったし、餌を気にいってもらえて満更でなかったし。

それからというものの餌をやる以外の世話をしているも、人間と意思疎通ができているような反応を見せることがたびたび。

「というか、こいつが人間のようだ」と不思議に思いつつ、蛸をかまっていると彼女のことを忘れられ、寂しさを紛らわせたから深く考え

なかったのだが。

といつて、いくら蛸に癒されようと、性欲だけはどうにもならず。

俺はもともと性欲が強いほうで、彼女も同じくとあり、相性ばっちり
の頻度が高いエッチをしていただけに、別れて一週間も経てば、行き
場のない熱が体に溜まってお手上げ。

好きな人としかエッチしたくないし、自慰はあまりしたくない。

といつてられず、蛸に餌をやり自分の食事も済ませたあと、むずむず
する股間に手を。

「は、はあ、はあう・・・」とズボン越しに撫でて、あるていど膨ら
ませてから、ゆっくりと下着をずらして抜く。

放出を待ち望む熱がせりあがって「く、ふう、んあ、あ、あ、ああ！」

と手を早めて腰を突きだすも「ぜんぜん物足りない・・・やっぱ彼女の体温が恋しい・・・」と胸に悲しみが染みて萎えそうに。

このままでは自慰が不発に終わリかねず「どうしたら」と瞼をあげたなら、視界にはいった水槽。

蛸が硝子に触手をへばりつかせて俺を見ている・・・？

ふつうなら気のせいと片づけるところ、この一週間、あの蛸の蛸らしからぬ人間っぽい思考をしているようなふるまいを目にしてきたから。「俺の自慰行為に蛸が目を釘付けにして興奮している」ように思えてしまい。

子供やペットに一人エッチを見られたら、とんでも居たたまらず、すぐに中断する、というか体も頭も冷めてつづけられないだろうが、俺

のはむしろ復活して「んん、んあ、ふああ・・・！」と先走りが溢れだす。

さすがに蛸から顔をそらして視界を閉ざしたとはいえ、それならそれで、その触手がからみついて扱くという生々しい想像を。

想像するにしても、触手がまとわりつく女体だろうに、どうして自分が犯されているような・・・。

我ながら疑問を抱きながらも、錯覚とは思えないほど粘着質な触手の感触を覚えて「はあう、んふ、んああ、くうう！」と濡れた股をぬちやぬちや。

「いい、さつきより、いいけど、まだ足りない・・・。」と熱い吐息をして、気がつけば「シャツをめくりあげて胸を露に。」



ガンダロヤンキーは神様の一物を

啜えたまま祭りで燃え滾る

男たちは雄っぱいを吸われつくす

真夜中の田舎道はほとんど車が通らないというのに。

バイクで爆音をたてて走ったところで事故の危険度は低く、まわりに家もなくさほど迷惑でないはずが、学校から何十回目かの停学処分。

おまけに今回は「祭りが人手不足だから手伝いなさい」と命令。そうしなければ退学処分をくだすという。

田舎すぎてバイトできるところは皆無、子供がすくないからカツアゲもたかが知れて、薬を売るなどの危ない商売もしてないとあり、万年金欠。

なけなしの小遣いをくれる親にしろ「せめて高校を卒業してくれ！も

し中退したら勘当だあ！」と宣告しているに「上等だ、ぼけえ！」と啖呵を切れるほど家出資金がない俺らは退学処分は避けたく、渋々祭りに参加。

祭りに参加するのは中学二年以来。

高校生からは禪に裸で法被を着なければならず、現代っ子には抵抗があつたが「おお、焼けた肌に赤い法被が栄えるな！」「さすが元柔道部、禪をすると鍛えあげた肉体に磨きがかかるようだな！」「とおっちゃんどもが手を叩いてやんややんや。

だけでなく、法被から覗くわがままボディを異性が放っておかず、熱視線を送りまくり。

「ふん、祭りもわるくないな」と思いつつ、先公の命令に忠実に従うつもりはなく、頬を赤らめて見つめてくる一人に耳元で囁き、森の暗

がりへ。

祭りの明かりが遠くながら辛うじて届くようなところでアオカン。

「よ、よかったよ、わ、わたし友だち、待っているから、いくね・・・」
と浴衣を直して去っていった背中を見て、息を切らしながら舌なめずり。

年に一回の祭りに情熱を燃やす野郎どもの血氣盛んぶりに当てられたか、まだまだ精力が有り余って、飢えたように物足りない。

サボれば退学処分とはいえ、先生だって四六時中見張っているわけではなからうし、そも禪野郎どもがこった返しているなかで見つけるのは難しいだろう。

「というわけで、御輿が練り歩く間はたのしませてもらおうかな」と

鼻唄を吹いて女を物色しにいかうとしたとき。
足になにかがあたり、なにかが地面に散らばった。

感触と音からして石のようで、餓鬼がいたずらで山のように積んだのか。

そう思いつつ、放って歩いていかうしたら「待たぬかあ！この不届きものめええ！」と頭のなかに絶叫が反響。

「よくも、わたしのまえで目が腐るような醜く不浄な行いをしたなあ！

さらには入れ物にまで無礼を働くとはああ！」

脳みそにきんきん声が突き刺さるようで目眩を覚えながら「これが幻聴でなければ」と考える。

暗くて見えないが、ご神体のような石像を蹴って壊したから相手は怒っているのだろうと。

とにかく頭のなかに蚊が飛びかっているような声を静めたく「わかったよ、明るくなったら直すから」と宥めるも「それだけでは許さぬう！」と激昂、鼓膜が内側から突き破られるような響き。

「貴様、祭りを軽視して冒瀆するような無礼千万な行いを尚もしようとしているだろう！」

わたしの偉大なる兄の輝かしい功績を称える祭りに不敬なまねをするなど、許しはせぬぞおお！」

相手が神だろうと、いい加減鬱陶しくて「許さないってえ？どうするわけえ！？」とやけになって噛みつけば「こうだああ！」と急激に尻

の奥にすさまじい圧迫感が。

「つつつつうう！」と声にならない叫びをあげて地面に膝を屈し、息をつめながらおそるおそる尻に手を。

太く固いものがぎちぎちに詰めこまれている感触があるも、禪をずらして触れば、たしかに広げられているが、空洞。

「ど、ということ？」と困惑する俺の頭をさらにかき乱すように「わたしの一物だああ！」とまぬけな響きながら怒声が。

「祭りから遠ざかるほど、躍動するぞお！

ついでに胸にもしかけをしておいたから、せいぜい祭りで血を滾らせておる男どもに気をつけることだなあ！」

「祭りが終わるまで啞えさせておくぞおお！」を最後に叫びは聞こえ

なくなり、神様の透明の一物が律動しだす。

俺は女しか抱いたことがないし、一人エッチでも自分の息子以外は触らない。

初体験にして光栄というべきか、神様の男根をぶちこまれたわけだが、はじめの痛みと不快感はどこへやら、いつの間にか中が女のように潤っているし、摩擦されるたびに「はあう、ああ、あああ、ああうん……！」と禪が張りつめて染みが広がるし。

「糞エロ神が……！」と悪態を吐いて奥歯を噛みしめ、起き上がったなら祭りとは逆方向へ。

中学三年で柔道部を辞めてから投げやり全開の俺だ「神に罰を与えられようが、退学処分されようが、知ったことか！」と前屈みになりながら歩いていく。

が、神様がいったとおり、一歩一歩すすむたびに一物の暴れ具合が増す。

一旦、ぬいては突きあげるといふ過激さにたまらず「んひいい！」と射精してしまい、倒れそうになつたところ木にしがみついた。

すこし休んでから、また歩きはじめようと思つたのだが、絶え間なく奥を先っぽで突かれまくつて「んんお！おふうう！んおおう！」と精液が噴きっぱなし。

強制過剰快感供給が辛すぎるし、腫れたように膨れあがる息子と胸の突起が、むずむずしてしかたないし。

「ああ、ああ！乳首とちんこめっちゃ触りたい・・・！」と焦がれるも、これも神様の仕業なのか、手がびくともせず。

禪の先っぽが木に触れそうに触れず、もどかしすぎて死にそうになつていたところ「マサル？」と藪を掻きわける音と声が。

